学会レポート

故米田治泰氏コレクションについて

上柿　智生

1974年10月に当時気鋭のビザンツ学者であった米田治泰氏（当時大阪市立大学文学部助教授）が35歳の若さで亡くなり，氏の遺稿・蔵書および研究ノートなどが遺された。今年に入り，この遺稿類を大阪市立大学のビザンツ学文庫の一部に「米田治泰氏コレクション」として受け入れることになった。この小文では，遺稿類の内容確認および整理作業に携わった草生久嗣准教授を中心とした有志の一員として，受け入れの経緯の説明に加えてコレクションの概略的紹介を行っていきたい。

米田治泰氏は1938年11月に三重県に生まれ，京都市立紫野高校を卒業した後京都大学および同大学院にて西洋史学を専攻，1966年より京都大学人文科学研究所助手を勤め，大阪市立大学には1969年に講師として着任した。ビザンツ封建制論を始めとしたビザンツ史に関する論文を次々と発表し[1]「ただでさえ専攻家の少ない日本のビザンツ史学の，いわばテイクオフの強力な一翼のにない手[2]」として将来を嘱望されていたのみならず，その関心をビザンツ文明一般そしてユーラシアと近現代に亘る時空にまで拡げ，森安達也氏との共著『永遠のイコン』に加えてビザンツ都市とイスラーム都市の比較やオスマン帝国治下タソス島の統治をテーマにした論考をも著し，1969年には京都大学人文科学研究所学術調査団の一員としてユーゴスラビアの農村の調査に携わった。しかし氏は研究の道半ばにして病に倒れ，日本のビザンツ史研究は大きな痛手を受けることになった。

米田氏の遺稿類はその後も（一部は失われた可能性があるにせよ）米田家に保管されていたものの，発見されたのは2016年末，治泰氏の父貞一郎氏（元京都市立堀川高等学校校長，元京都市教育委員会事務局指導部長，京都学園大学名誉教授）の逝去に際して，奈良教育大学教職大学院の玉村公二彦教授によって行われた遺品整理がきっかけであった。当初2017年1月7日に処分が予定されていたところ，多くの先生方の協力があって幸いにも連絡が間に合い，急遽大阪市立大学にて整理および保管を申し出る運びとなった。段ボール6箱分になった学術的遺品の開封作業は1月28日に行われ，以降有志で米田治泰氏コレクションとして資料の整理およびリスト化が進捗中である。2017年8月の現時点で資料の全容が明らかになっているため，以下で大まかな分類毎に紹介していきたい。

米田治泰氏コレクションは大きく分けて書籍（約70冊），学術雑誌（約50冊），ノート類（挟まれたプリントを含む。約95冊）からなり，これに加えて原稿・論文コピー・地図等が存在する。まず書籍のうち特に洋書の内容をみると，アトス山イヴィロン修道院のプラクティカ（土地台帳）やヴァシリエフの『ビザンツ帝国史』等の専門の研究用の史料や文献がある他，西欧中世やロシア，イランに関する研究書や宗教社会学や儒学に関する本，近代ギリシア詩集（英訳）やイマヌイル・ロイディス著ロレンス・ダレル訳になる『女教皇ジョーン』等の文学書が，氏の幅広い興味を今に伝えている。1960年代の通貨危機を中東戦争やベトナム戦争に絡めて検討したフランス語書籍の存在に，当時の世相と氏の関心を読み取ることも可能であろう。

雑誌類としては，ソビエト科学アカデミー発行の「ビザンツ年報」，チェコスロバキア科学アカデミースラヴ研究所発行の「ビザンティノスラヴィカ」，および「東洋文化研究所紀要」がまとまった形で存在している（各々vols. 4 － 35（1951-73），vols. 23-1 － 32-1（31-2除く，1962-71），vols. 41 － 46（1966-68））。当時のビザンツ封建制論争においては，中後期ビザンツ帝国における大土地所有と免税権の伸張に関して，概してソビエト学界では西欧封建社会と並行した社会経済的発展段階を見ようとした一方で，フランス系の学者はローマ帝国以来の国制や公概念を重視して人格的隷属等政治的領域に及ぶ封建制は否定する傾向にあった[3]。ここで特に「ビザンツ年報」について述べれば，上記二つの研究潮流の間にあって，「条件的土地保有」という形式から出発して次第に私的保護・支配関係の実態を強めていったビザンツ世界特有の社会のダイナミズムをユーラシアの諸文明との比較的視点をも持ちつつ見据えようとした米田氏にとって旧ソ連のビザンツ学が有していた重みをそこから窺知することができるのではないだろうか。

米田氏の研究と思考の軌跡を辿るという意味で最も興味深いのは遺されたノート類であろう。上記ビザンツ封建制を中心とした様々なトピックに関する，ビザンツ学者（オストロゴルスキー，ルメルル，カジュダン，シュジュモフ etc.）の文献や論文を読解した際の詳細なメモを見ることができる他，例えば中世イスラームやオスマン帝国の社会経済史論文も扱われている。『農民法』や種々の免税特権文書の書き写し，翻訳あるいは要約のノート，そしてヒエログリフも含む様々な語学の学習ノートの他に興味を引くのは，1968－70年頃の「『封建制』研究班」等が主催したと思われる研究会の発表メモおよびレジュメであり，当時の研究発表のあり方を垣間見るための貴重な資料であろうと思われる。

その他の資料として特筆すべきは米田氏直筆による原

稿である。「ビザンツ帝国におけるエピボレー制度」と題された論文要綱の他に，従来存在が示唆されていたニコラ・スヴォロノス著『近代ギリシア史』の未刊行訳稿（第四章まで）が発見されたことは，今回の調査の一つの成果といえるかもしれない。

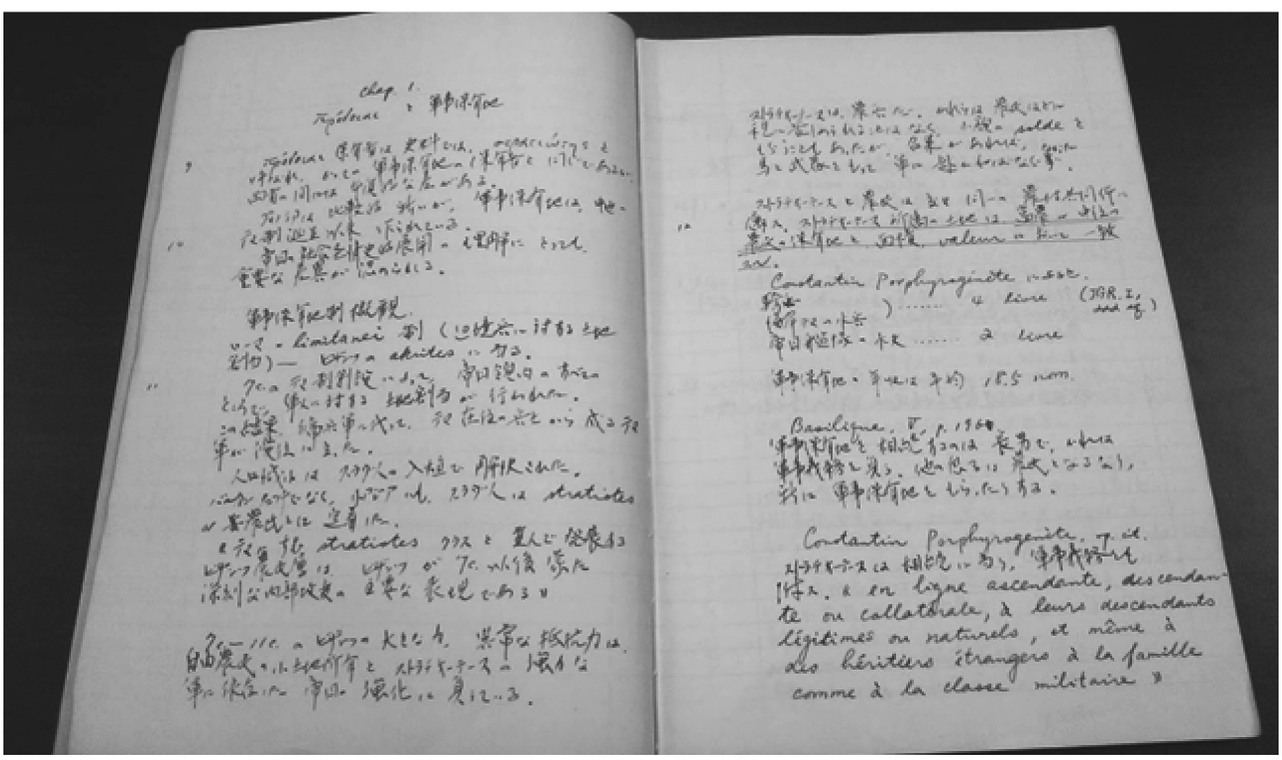
以上，拙いものの「米田治泰氏コレクション」の概略的紹介を行った。今後ビザンツ史研究および日本におけるビザンツ学史研究に資するため，資料のリスト化およびラベリングを完成させることでより簡便な資料アクセスを期する予定である。

注

1．米田治泰氏が生前発表した主要な論文は以下に収録されている。米田治泰『ビザンツ帝国』角川書店，1977 年。

2．日台敏一「米田治泰氏を悼む」『大阪市立大学紀要　人文研究』第 26 巻第 11 分冊，1975 年，4 頁。

3．より詳細には以下を参照。米田治泰「『ビザンツ封建制』研究の動向」『西洋史学』66 号，1965 年（米田治泰『ビザンツ帝国』角川書店，1977 年，119－139 頁）。



G. オストロゴルスキー『ビザンツ封建制の歴史のために（1954 年）』の読書ノート